2026年9月20日（日）主日朝礼拝説教

『いのちの書』井上隆晶牧師
ヨハネの黙示録20章11～15節、ルカによる福音書10章17～24節

## ❶【命の書にあなたの名前が載せられている】

伝道から帰って来た72人の弟子たちは喜んで報告しました。「**主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。**」それに対してイエス様は「**悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。**」（ルカ10：20）と言われました。名前が天に書き記されているというのは、神様の手元にある「命の書」という巻物のことを言っているのです。この「命の書」は何度も聖書に出て来ます。モーセはイスラエルの民の罪が赦されないのであれば「**このわたしをあなたが書き記された書の中から消し去ってください。**」（出エジプト32：32）と祈り、詩篇の著者は「**命の書から彼らを抹殺してください**」（詩編 69：29）と祈り、今日の朗読でも「**その名が命の書に記されていない者は、火の池に投げ込まれた。**」（黙示20：15）と書かれています。命の書とは、神の国に入ることができる名簿のようなものです。

●これを読むと「シンドラーのリスト」という映画を思い出します。軍需工場を経営していたシンドラーは1200人のユダヤ人を労働者として雇い、絶滅収容所から救い出しました。リトアニアの外交官であった杉原千畝（正教会の信者）も、ユダヤ人難民を救うために約6000人のビザを発行しました。戦時中は、名簿に名前が載せられているかどうかで、生死の運命が分かれたのです。

私たちは、命の書にあなたの名前が載せられていると聞いてもあまり関心もなく、感動もしないかもしれません。しかしそれは来世の命を左右する書なのです。**シンドラーや杉原千畝が命令を無視し、自分の命をかけてユダヤ人を救ったように、キリストの流された血と犠牲によってあなたの名が命の書に記されたのだということを思い出してください。自分がしたことを誇るのではなく、神キリストがしてくださったことを誇らなければなりません。「誇る者は主を誇れ」**（Ⅰコリント1：31）です。キリスト教短大の学長をされていた岩本助成牧師はいつも「**栄光はキリストに、恥は私たちに**」と言っていました。

## ❷【神を知ることが出来る人は、選ばれた人だけである】

「**そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。『天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。』**」（21節）「これらのこと」とはイエス様が誰であるかということでしょう。それはこの世の学者にではなく幼子のような

者に示されたというのです。幼子のような者とは、自分が小さく、弱く、無力であることを本当に知っている者のことです。

**「すべてのことは父からわたしに任されています。父のほかに、子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかには、だれもいません。」**（22 節）イエス様が誰であるかを知っているのは父なる神様だけです。それと同じように父なる神様のことを知る者は、イエス様以外にはおられません。なぜならイエス様は父と同質なる神であり、万物が創造される前に、父なる神から唯一生まれた御子だからです。被造物は創造者を知ることは出来ず、時間の中に造られた者は永遠者を知ることはできません。神以下の者は、神を知ることはできないのです。**私たちは同じものによって同じものを知るのです。**だからイエス様以外に父なる神を教える者はいないのです。そして「**父を知る者は、…子が示そうと思う者のほかには、だれもいません**」とありますから、父なる神様を知ることができる人というのは、イエス様が「この人には父を知らせよう」と思った人だけなのです。すべての人ではないのです。人間の力では神を知ることは不可能なのです。それはパウロも言っています。「**世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。**」（Ⅰコリント 1：21）

●統一協会を脱会してから、熱心に教会の集会や行事に参加し、手伝ってくださっていた数人の若い青年たちがいました。彼らはまじめで、とても誠実でした。しかしやがて彼らは教会から去って行きました。それはイエス様がその人たちを選んでおられなかったからです。人間の熱心さでは信仰は続かないし、できないのです。信仰は人間の業ではなく、選びであることが分かるのです。

私たちが神様のことを知ったのは、イエス様が「**お前に父なる神様のことを見せてあげよう**」と思ってくださったからです。うれしいことです。私が幼子のような者であり続ける限り、イエス様はもっと神様のことを教えてくださるでしょう。神は誰にでもご自分の姿と秘密を見せることはしません。高慢な者に自分の姿を見せたら、噛みついてくるからです。「**神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならない**」（マタイ 7：6）です。神は謙虚な者にその姿を現し、教えます。

### ❸【神キリストと神の国に希望を持つこと】

**「それからイエスは弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。『あなたがたの見ているものを見る目は幸いだ。言っておくが、多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」**（23～24 節）

イエス様の弟子たちも、ユダヤ人もローマ人も、人となった神をその目でじかに見たのです。でも彼らの目はふさがれていて、自分の目の前に神がおられることに気がつきませんでした。旧約の時代に人々は神の言葉を直接聞くことを怖れました。しかし弟子たちは神の口から出る言葉をじかにその耳で聞いたのです。で

も彼らは気がつかず、軽く聞いていたのですぐに忘れてしまいました。**本物さえ現れたら人は変われるのではありません。人間の方が、本物と偽物を見分ける力がないからです。**ああ、人は何と見えなくなり、聞こえなくなったのでしょう。イザヤはそのことを「**あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。この民の心が鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。**」（マタイ 13：14～15）と預言しました。私たちは教会に来てイエス様を仰いで礼拝し、神の言葉と天国の秘密を聞き、イエス様の体を食べることを最上の幸せだと、本当に思っているでしょうか。あなたの目と耳は正しく開いていますか？開くことを願います。

今の信仰者は神の国のことではなく、この世のことばかりを考えているように見えます。そしてこの世のことをくよくよと悩んでいます。**この世の真相をしっかりと知らなければなりません。讃美歌で歌うようにこの世というのは「いつわりの世」なのです。**もともとは神が創造された良いものでしたが、人間の罪によって死が入り、この世は崩壊しました。スイスのユングフラウにある世界最大の氷河が地球温暖化の影響で 2100 年までにすべて溶けて無くなるそうです。この世はどんどん悪くなり、崩壊してゆくでしょう。「なぜ神様は愛のお方なのに、多くの人が災害で亡くなるのをお赦しになるのか、神様が世界を支配しているのなら、なぜ戦争がやまないのか」と人は言います。愚かなことです。**それは神が人間に自由意志を与え、人間にこの世を支配する権限をお与えになったからです。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。…生き物をすべて支配せよ。」**（創世記１：28）と神は言わたではないですか。**この世は神の意志と、人間の意志の二つが働いている世界であり、神の支配と人間の支配の二つが働いている世界なのです。**神は愛をもって支配しますが、人間は罪で支配します。人間は神に従わず、神の支配に屈しません。人間の罪によって多くの人が犠牲になるのです。すべてを神にせいにしてはなりません。神には落ち度はありません。悪いのはすべて人間です。だからこの世に希望を持ってはいけません。この世は過ぎ去るからであり、不完全だからです。信仰していても、この世は何でも起こることを覚悟しておかねばなりません。キリスト教というものを誤解している人がいます。信仰とはこの世ではなく、来世での報いを求めるものなのです。

●逢坂元吉郎がこんなことを書いています。「われわれはともすれば来世は神がどうかして下さるから、今世だけを何とかしておればよいと考えやすいのであるが、これは怖ろしいことである。今世は来世のための準備の場所である。」「教会はこの終末の審判と希望とを宣べ伝えるところに立っている。教会はこの使命を奉じて一貫したるものがなければならぬ。…もし終末のことを考えないで、ただ現世のすぐに間に合うことを考えていたのでは、教会は意味をなさない。願わくは御国を来たらせ給えとの主の祈りの一節は、終末の来たらんことを祈ったものであ

る。…来るべき御国があるゆえに、われわれはこの地上にあって暫しの教会生活を送っているのである。」

神と神の国に希望を持つことです。人は何歳になってもやり直すことはできます。ゼロからでもキリストさえいたら、やり直すことができるのです。この教会も私が来たときはゼロでしたが、キリストが共におられたので豊かにされました。キリストさえいたら命が生まれるからです。キリストが罪も死も飲み込むからです。人間のすることは信じられなくても、キリストが約束なさったこと、キリストが始められたことは信じましょう。栄光が常にキリストと御父と聖霊にありますように。